

# シュタイナー幼稚園における身体表現活動

—— ライゲンを中心に ——

広瀬綾子

## 要旨

本稿では、シュタイナー幼稚園で行われている身体表現活動「ライゲン」を取り上げ、この活動がいかなるものであるか、日本におけるシュタイナー子ども園のライゲンを手がかりに、具体的な内容や特徴について明らかにした。また、ライゲンを支えるシュタイナーによる教育理論、すなわちライゲンが幼児の模倣性に基づいて行われていること、絵画性と音楽的なリズムに満ちた身体活動であることを明らかにした。さらに、ライゲンの教育的意義として、身体器官の育成や身体活動による意志の育成、および話す力の育成に寄与することを明らかにした。

キーワード：身体表現活動、シュタイナー幼児教育、ライゲン、幼児の模倣性、身体活動と意志

## はじめに

R. シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) の教育理論に基づくシュタイナー幼稚園は、世界中に広がり、現在、世界 80 ヶ国以上に 1,700 園以上が存在する<sup>1</sup>。シュタイナー幼稚園における教育は大きな注目を浴び、わが国でもこの教育を取り入れる幼稚園・保育園は 50 園以上にのぼる。

シュタイナー幼児教育には、いくつもの特徴がある。縦割り保育やオイリュトミー、絵本の読み聞かせではなく、童話・昔話などの「語り聞かせ」(ストーリーテリング)の重視、CDやDVD、タブレット端末などの不使用、ライゲン等による身体表現活動の重視、人形劇、ぬらし絵などが、その代表的なものである。

ライゲンについては、シュタイナー幼稚園で行われるさまざまな教育活動の一つとして取り上げられ、具体的な歌や詩とともに紹介されたものはあるが、シュタイナーの教育理論にもとづいて体系的に明らかにされたものはきわめて少ない。またその大半は欧米のものであり、日本のシュタイナー幼稚園で行われているライゲンを明らかにし、これを手がかりに論述したものはほとんどみられない。

本稿では、身体表現活動とりわけ「ライゲン」を取り上げ、日本のシュタイナー幼稚園で行われているライゲンを手がかりに、シュタイナー幼児教育で行われているライゲンの活動の実際、すなわちライゲンの具体的な内容や特徴について明らかにし、その後、ライゲンを支える教育理

論、およびライゲンの教育的な意義について論述したい。

まずはじめに、ライゲンがいかなるものであるか、その内容と特徴について述べたい。

## 1. ライゲンの内容

### (1) ライゲン（輪になって歌い踊って、身体を動かす）

シュタイナー幼稚園では、自由遊びが終わった後、または一日の後半のグループ保育の中に、教師の指導の下に行われる身体表現の教育が組み入れられている。それは、ドイツ語の「Reigen（ライゲン）」と呼ばれるものである。ライゲンは、「リズム遊戯（rythmisches Spiel）」、「輪舞」、「ジング・シュピール」とも呼ばれる。

ライゲンの特徴は、①身ぶり、手ぶり、動作といった身体の動き、②音楽（歌）、③言葉（リズムカルな詩や語り）の三つが融合した活動であることである。似た活動にリトミックが挙げられるが、リトミックでは、子どもが音楽を聴き、感じ、身体運動を通して表現する活動が中心であり、言葉は介在しない。ライゲンは、身体活動の側面、音楽活動の側面、言語活動の側面の三つが組み合わさった活動であり、身ぶりや動作による子どもの身体の発達、音楽を通したリズムや呼吸の育成、「話す、聞く」といった言語能力の基礎となる力の育成といった、調和のとれた育成を視野に入れている。注目すべきことは、これら各々が独立して行われるのではなく、歌いながら、語りながら身体を動かすといったように、すべてが連動して一体となって行われることである。

ライゲンは、季節の出来事や一日の生活、自然の描写や職人の動き、動物の動きなどを身体で表現し、楽しむ活動である。ライゲンの時間では、円になって、教師が季節にふさわしい歌や詩、生活の中の出来事などのストーリーを歌い、語る。教師は歌いながら、語りながらリズムカルに動作を行うが、幼児はこれを模倣して共に歌を歌いつつ身体を動かすのである。

### (2) 東広島シュタイナー子ども園さくらにおける「稲刈りのライゲン」

すでに述べたように、日本においてもシュタイナーによる幼児教育を取り入れている幼稚園や保育園、子ども園がいくつもあるが、そのうちの一つに「東広島シュタイナー子ども園さくら」（広島県東広島市）がある。この子ども園では、シュタイナーの理論に基づく幼児教育が全面的に行われ、ライゲンはその主軸をなす重要な教育活動として位置づけられている。

東広島シュタイナー子ども園さくらで行われている「稲刈りのライゲン」について述べたい。さくらでは、子どもたちは、子ども園の前に広がる田んぼで田植えを行い、秋には稲刈りを行う。この稲刈りの活動を行った翌日、この出来事や活動をライゲンで行う。すなわち鎌を持ち、稲を刈り、刈った稲を藁で巻いて束ね、天日にさらして干すなどの一連の作業を歌や語りと共に身体で表現して楽しむのである。このようにライゲンは、子どもたちの日々の活動や園で行われる季節の行事などと密接に結びついて行われる。日本には欧米とは異なる四季の行事があり、日本の風土や文化に根差したライゲンが考案され、日本語の豊かな表現や美しい言葉を生かして行われ

ることが多い。「稲刈りのライゲン」は、日本の四季や日本人の伝統的な生活の営みである米作りを大きな柱として、さくらの園長である岩崎寛美により制作されたものである。以下「稲刈りのライゲン」の展開について具体的に述べたい。

まず教師と共に子どもたちは円になる。教師は以下示すように、動作やしぐさを行いながら歌い、リズムカルに語る。歌とリズムカルな語りは、交互に行われる。子どもたちは教師を模倣して、同じように動作やしぐさを行いつつ歌い、言葉を言う。

- (歌) あさひがのぼる、みんなを照らす (両腕を頭上に掲げ、丸く太陽の形を作る)
- (歌) ねむったお百姓<sup>2</sup>、静かに目をさます (床に伏せ、目をこすりながら起き上がる)
- (語り)「今日はとってもいい天気、今日はとってもいい天気」(のびをする)
- (語り)「シャツを着て、ボタンをとめて、ズボンをはいて、すそ入れて」(シャツを着たり、ズボンをはいて、すそを入れる動作)
- (語り)「秋の田はあたりいちめん、こがねいろ」(両腕を横に伸ばす)
- (語り)「いねはお米をたくさんつけて、重いあたまをたらしめます」×2 (五本の指を稲穂に見立て、そこに米粒が実り、穂を垂れている様子を指や腕で表す)
- (歌) 風にゆれるいなほ (手を左右にゆっくりと振る)
- (歌) 重いあたまゆらす
- (歌) ざわざわざーわ、ざわざわざーわ (腕をゆっくりと左右に振る)
- (歌) お百姓さんが 大事にそだてた (すきやくわなどで耕す動作)
- (歌) ざわざわざーわ、ざわざわざーわ
- (歌) お日さま、あめ、風と大地のめぐみ (両腕を頭上に掲げ、丸く太陽の形を作り、次にその手を降ろして雨を表現し、さらに両腕を前に出し、一步踏み出して風を表現し、足踏みをして大地を表現する)
- (歌) ざわざわざーわ、ざわざわざーわ
- (歌) みんなのちからで、いねは実った (米粒を両手ですくう動作)
- (語り)「すどくとがった鎌を持ち、にぎってザク、にぎってザク」(手で鎌の三日月形を表し、かがんで稲の根元をにぎり、鎌で刈りとる動作)
- (語り)「いねをあつめて、あつめて、わらでまいて、わらでまいて」(稲を集めて、わらで巻く動作)
- (語り)「ねじってねじってねじって、クル、ねじってねじってねじって、クル」(ねじってわらを巻く動作)
- (語り)「こりゃこりゃまだまだおわらんわ、こりゃこりゃまだまだおわらんわ」(立ち上がって、ひたいの汗をぬぐう)
- (語り)「にぎってザク、にぎってザク」(再びかがみこんで、稲を鎌で刈りとる動作)
- (語り)「いねをあつめて、あつめて、わらでまいて、わらでまいて」(稲を集めて、わらで巻く動作)

(語り)「ねじってねじってねじって、クル、ねじってねじってねじって、クル」(ねじってわらを巻く動作)

(語り)「田んぼのまんなか、木のはしらを立てて、反対側には木のくいを立てて」(柱を肩に持ち、円を歩きながら)

(語り)「長いぼうを渡して、いねの束を割ってお屋根にしいて、ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ」(棒を渡して、稲を割って屋根にかけ、整えるしぐさ)

(語り)「いねの束を割ってお屋根にしいて、ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ」(稲を割って屋根にかけ、整えるしぐさ)

(語り)「いねのお屋根ができました」(腕で屋根の形の三角を作る)

(語り)「お日さまよ、からからにかわかして、お日さまよ、からからにかわかして」(両腕を頭上に掲げ、丸く太陽の形を作る)

教師が人差し指を掲げ、振る。

(語り)「あかとんぼがやってきた」(両腕を水平に伸ばし、振る)

(歌) あかとんぼ～、あかとんぼ～ (両腕を水平に伸ばしたまま、走り回る)

(歌) 木の枝にとまったよ～ (両腕を伸ばしたまま、片足で立って止まる)

(歌) あかとんぼ～、あかとんぼ～ (両腕を水平に伸ばしたまま、走り回る)

(歌) 木の枝にとまったよ～ (両腕を伸ばしたまま、片足で立って止まる)

(語り)「あかとんぼ、遠いおそらにとんでった」(赤とんぼを見送る仕草)

(語り)「お百姓さんはおうちにかえって、しずかにしずかにねむります」(床にしゃがみ、座り、伏せて眠る動作)

## 2. 「ライゲン」の特徴 ～自然や人間の生活の営みに親和性を持たせる

ライゲンの特徴について詳しく述べたい。ライゲンで扱われるテーマには、大きく四つがあり、これらが身体表現、歌、語りを伴って行われる。

一つ目は四季の自然および自然現象である。「稲刈りのライゲン」は秋を象徴しているが、さらに細かくみると、ライゲンの進行の中で太陽、雨、風が表現されている。四季の自然とは、「春における植物の芽生え、夏における大いなる生育、秋にもたらされる収穫、冬におけるゆっくりとした退行」<sup>3</sup>であり、「太陽、雨、風、嵐、雷、霜、雪の作用など自然界の多様なプロセス」<sup>4</sup>である。さらに「さまざまな詩と歌をいかに調和させるかは、1年間全体を見渡すことによって見出すことができる」<sup>5</sup>とされ、年間で起こるプロセスを意識すれば、一か月または一週間や一日単位で小さなまとまりがもたらされるという。「稲刈りのライゲン」では、お百姓が朝目覚め、身支度をととのえ、農作業に精を出し、帰宅の途について一日を終え眠るという、一日のリズムが表現されている。こうした一日のリズムや季節のサイクルを表現することは、「日常生活に秩

序 (Ordnung) をもたらず」<sup>6</sup>ことを意味する。

二つ目は、四季の自然に基づく人間の生活である。ドイツのシュタイナー幼稚園では、8月の終わりから9月のはじめにかけて、すなわち晩夏から初秋の移り変わりとともに人間の生活は、ライゲンにおいて次のような「収穫」のモチーフを据えて表現される。「穀物の刈り入れからパンを焼くことまで、木をゆり動かすことから実を集めることまで、そして、庭のカブを引き抜くことまで」<sup>7</sup>である。東広島シュタイナー子ども園さくらでは、春には、春の歌、種まきのライゲン、小鳥のライゲンなどが行われる。種まきのライゲンでは、農夫が畑に種をまく様子などを、リズムに合わせて歌や語りと共に身ぶりや動きで表現する。秋には「稲刈りのライゲン」にみられるように、収穫、稲刈りなどの様子が積極的にライゲンに取り入れられる。「ヴァルドルフ幼稚園におけるもっとも重要な課題は、生活そのもの、生活の仕事を幼稚園に持ち込むことです。重要なのは、それらの形態がいかにして、子どもに受け入れられるものになるか、遊びに持ちこめるかである」<sup>8</sup>。子どもたちが人間の生活の営みに親しみをもてるような内容が大切である。

三つ目は、さまざまな職業や職人の仕事や活動である。人間の生活の営みは、さまざまな仕事すなわち「大工、庭師、羊飼、釣り人、靴職人、家具職人、鍛冶屋、洗濯女」<sup>9</sup>などで成り立っている。さまざまな職業ならではの動作や動き、たとえば靴づくりの職人が靴を作るときに見せる動作や、家具作りの職人が板をカンナで削るときに行う身体の動き、ピアニストがピアノを弾くときに見せるしぐさ等々を身体で表現するのである。「私たちが知っているものすべてに関係性や活動の方法があること、それは遊びのなかで取り入れられ、大切にされる」<sup>10</sup>と同時に、「靴を完成させる靴職人への感謝」<sup>11</sup>といった敬意の気持ちも育まれる。「稲刈りのライゲン」では農作業の様子、すなわちお百姓が鎌をもち、稲を刈り、小分けにしてわらで束ね、その稲を天日で乾かすという一連の農作業が詳細に描かれている。

四つ目は、さまざまな動物が登場することである。飛び跳ねる仔馬やウサギ、しのび歩くへびなど、特徴的な動作を行う動物がしばしば登場する。「稲刈りのライゲン」においても赤とんぼが登場し、子どもたちは片足で立ち静止するなどして、特徴的な動きを楽しむのである。

以上述べたような、四季の自然やそれに基づく人間の生活、職人の仕事をライゲンのテーマに据えることは、次のような意味を持っている。すなわち、幼児が一年の四季の流れを感じたり、人間の生活の営みを体験することで、一年のリズムを身体の中に落としていき、この地上のさまざまな事物や生活に対して親しみを持って受け入れることができるようになることである<sup>12</sup>。四季の移り変わりを人間の生活を中心に繰り返し繰り返し、歌や言葉に合わせてリズムで表現していくと、子どもたちは全身で捉え、吸収し、自身を取り巻く自然や事物との生き生きとした関係を持つことができるようになる。自然と自然との内的な結びつきや、自然と人間との関係が、ライゲンを通して子どもの魂に深い影響を及ぼし、子どもの心とからだは調和的に形成されていくのである<sup>13</sup>。シュタイナーによれば、幼児期の子どもは、霊的な世界から地上に降りてきて、まだ夢想的な意識の中にいる。そのような状態の幼児を、うまく地上に足をつけていけるように補助し、この世界とのよりよい結びつき—幼児を取り巻く環境である自然物や人間の営みに親和性を持つことを促すこと<sup>14</sup>が幼児期の教育の大きな課題の一つである。この課題に対して大きな意

味を持つのがライゲンである。

### 3. ライゲンを支える教育理論

#### (1) 一幼児の模倣性—周囲の人の身体の動きへの関心と模倣への欲求

すでに述べたように、ライゲンでは、教師がすべて先導して行い、子どもはそれを模倣する形で行われる。すなわち歌を歌い、詩やストーリーを語り、身体を動かすのは、まず教師であり、子どもは教師に続いてそれらを模倣して歌い、語り、身体を動かすのである。子どもがあらかじめセリフや詩を暗記していたり、個々に役が割り当てられたりすることはない。また、教師抜きで子どもたちだけで行うことは一切ない。子どもたちは、教師と共に歌い (mitsingen)、共に話し (mitsprechen)、すべてを共に行う (mittun)<sup>15</sup>。ライゲンは、「教師が模範的な身体の動きを示し、幼児はそれを模倣する」との考え方に基づいて行われるものだからである。この考え方は、シュタイナーの幼児の本性についての人間学的な見方に由来する。以下、この見方について詳しく考察したい。

前述のように、ライゲンで重要なのは、教師自らが模範的な身体の動きを示し、幼児がそれを模倣することである。もとより、幼児期においては、視覚や聴覚をはじめとするさまざまな感覚器官が発達するがゆえに、幼児は周囲のモノや人の声・言葉に興味を示す。だが、それ以上に幼児が強い関心を示すものがある。それは、周囲の人の動作・身ぶり・手ぶり・しぐさ、すなわち身体の動きである。シュタイナーは述べる。「……幼児は、外界のある特定のものだけにのみ関心を向けます。決してすべてのものに対してではありません。幼児は、私たちが身ぶり (Geste)、手ぶり (Gebärde)、動作 (Bewegungsverhältnis) と呼ぶものに関心をむけるのです」<sup>16</sup>。

しかし幼児は、単に周囲の人の身ぶり、動作に関心を向けるにとどまらない。注目すべきことには、幼児のうちに、自分の意志でその身ぶり、動作を模倣しようとする欲求が湧き上がってくる。「……幼児は、周囲の人の身体の動きをみると、それを模倣しようとする欲求が出てきます」<sup>17</sup>。この欲求は、単に欲求として心の中にとどまるものではない。自分の身体を動かして実際に周囲の人の動きを模倣する活動を生み出す。シュタイナーは模範となる教師の重要性について次のように言う。「子どもは徹底的に模倣・真似する存在です。(中略) 子どもが真似をするのに適した方法で、私たちが子どものそばにすることが大事です」<sup>18</sup>。「子どもが模倣しようという衝動を持つことによってのみ、私たちは子どもに作用できます」<sup>19</sup>。この衝動は、決して強制されるものであってはならない。幼児が自らの意志で模倣することの重要性が次のように述べられている。「模倣を促すことは、場合によってはその子どもの中に衝動が芽生えるまで何か月もかけて待つべきである」<sup>20</sup>。

#### (2) 教育者が模範として示すべきライゲンは、いかなるものか

幼児は、たしかに周囲の人の身体の動きを模倣する。しかしだからといって、教師が幼児の前で単に身体の動きを見せればよい、と考えるのは、適切ではない。たとえ教師が模範的な身体の

動きを見せても、幼児が模倣しない場合が少なくないからである。教師が模範を示すとき、考えなければならないことは、幼児は教師の示す模範がどのようなものであっても模倣するのではないということである。幼児は、自分の好きな、心から欲している模範が眼前に示されるときにそれを模倣する。

では、幼児が、心から欲する好きな模範とは、具体的にはどのようなものか。シュタイナーによれば、その模範は一言でいえば、芸術的な要素を多く持った模範を言う。この芸術的な要素とは、大きくは、次の二つを意味する。

### ① 絵画的な動き

シュタイナーによれば幼児は、絵画的な要素に満ちた動きにとりわけ強い興味・関心を示す<sup>21</sup>。ライゲンではしばしば、種をまいたり、草刈りをしたり、畑を耕す動作、馬に蹄鉄を付ける動作、靴職人の身ぶりや動作、収穫物を積むなどの動きが取り入れられる。東広島シュタイナー子ども園さくらで行われるライゲンでは、既述のように稲を刈り、わらで束ね、天日干しする動作が取り入れられている。ライゲンでは、このような絵画的な要素に満ちた動きが大切にされる。その際、ある注目すべき見方が存在する。それは、実際の動きを忠実に再現することが重要なのではなく<sup>22</sup>、デフォルメされ、美的に、「芸術的に構成された動き (die künstlerische geformte Bewegung)」<sup>23</sup>を行うことが重要である、との見方である。ライゲンでは、「すべての出来事が芸術的に昇華される (künstlerische Steigerung)」<sup>24</sup>のである。

### ② 音楽的なリズムに満ちた動き、身ぶり

シュタイナーによると、幼児が心から欲する好きな模範の二つ目は、音楽的なリズムに満ちた要素を持った模範である。教師は幼児の前ではできる限りリズムに満ちた音楽性に富んだ身体の動きを行い、それを模範として示さなくてはならない。シュタイナーは『精神科学の立場から見た子供の教育』(Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft, 1978)のなかで、「音楽のリズムに合わせて踊る動き (tanzende Bewegung)」<sup>25</sup>の重要性を述べるが、これをかれが主張するのは、身体を動かそうとする幼児の本性のうちに音楽的なリズムへの欲求をみるからである。かれは、このことを次のような言葉で述べる。「人間は、自分の身体活動を音楽的なリズムの中に、つまり世界との音楽的な関連の中に運び入れようとする意志を持って、この世界に生まれます。多くの場合、この内的な音楽的な能力は、幼児においては、3歳と4歳との間に存在するものです」<sup>26</sup>。かれは、この一節では、「3歳と4歳の間に存在する」と述べるが、この言葉の意味は、詳しく言えば、この年齢の間に際立ったかたちで現れるということである。幼児においては、音楽的なものへの欲求がこの年齢の間に目立って現れ、その能力は、その後着実に成長していくのである。

ライゲンにあっては、リズムの要素は、以下の二つのかたちで取り入れられる。一つ目は、リズムに満ちた身体の動きすなわち、「早い動き、ゆっくりとした動き」<sup>27</sup>や「丸く固まったり広がったりする」<sup>28</sup>動き、「周囲の空間すべてを埋める動きや、反対に、指先の感覚に集中し導く動

き」<sup>29</sup>などである。これらの動きは対極の動きであり、「吐き出し吸い込むリズム的な動き (die rhythmische Bewegung des Aus- und Einatmens)」<sup>30</sup>とも言われ、「収縮と拡散のリズム」<sup>31</sup>を意味する。「稲刈りのライゲン」では、教師と共に園児たちは手や体全体を前後にゆっくりと揺らして、風に揺れる稲穂を表現した後には対照的に、鎌を手を持ってザクザクと稲を刈る機敏な動きを行う。また、両手を水平に広げ赤とんぼになりきって勢いよく走り回った後は、家路につき、床にしゃがみ、そのまま寝転がって眠りにつく動作をする。このような「リズムカルで動的で生き生きとした身振りを伴った動き (rhythmische, dynamisch belebte Geste)」<sup>32</sup>は、幼児の身体のリズム組織に強く働きかける<sup>33</sup>。

二つ目は、ライゲンにあってリズムの要素は、「一日のリズム」<sup>34</sup>や「一年のリズム」<sup>35</sup>をも意味することである。「一日のリズム」とは、太陽が昇る朝に始まり、日が暮れるまでをいう。「稲刈りのライゲン」でいうと、お百姓が朝、目覚め、身支度を整え、農作業を行い、帰宅し眠りにつくという一日のリズムが見事に表現されている。「一年のリズム」とはすでに述べたように、「春における植物の芽生え、夏における最大限の成長、秋にもたらされる収穫、冬におけるゆっくりとした退行」を意味し、それは言い換えると、「大地の大いなるリズム」<sup>36</sup>である。

ライゲンにあっては、リズムの要素は、このようなリズムに満ちた身体の動きとともに、リズムをともなった語りすなわちリズムカルな語りのかたちで取り入れられる。「幼年期にはできるだけ美しいリズムの印象を感覚に与えることが特に重要である。詩歌の意味よりは、美しい響きの方に価値を置く必要がある」<sup>37</sup>。

以上、上に述べた、絵画的な要素と音楽的な要素の二つを兼ね備えた身体的な動きの模範が、幼児が心から欲する模範である。教師は、ライゲンにおいて、このような模範を示さなくてはならない。

### ③ 教師自身が自信を持ち、楽しんで

教師はまず、ライゲンの構成と動きを徹底して自分のものにしてから、子どもたちの前に立つことが重要である<sup>38</sup>。「一つ一つの身ぶりや動作にどのような意味があるのか、教師は歌の内容を生き生きとイメージできなければなりません。教師が自分の身ぶりや動きをはっきりと意識し、自信を持って行いますと、子どもたちは安心してそれを模倣しながら自分なりの表現をします」<sup>39</sup>。シュタイナーによれば、幼児は単に周囲の人の身ぶりや動作に関心を向け、その身振りや動作を模倣することにとどまらない。幼児はすぐれた模倣性を持つがうえに、周囲の人の内面や精神的な状態をも模倣する。教師がイメージ豊かに自信をもってライゲンを行うと、子どものなかに「模倣したい」という衝動が湧き上がる、すなわち「喜びを伴った模倣」<sup>40</sup>を生じさせる。反対に、教師がテキストに不安を抱いていたり、しっかり事前に読み込めていないと、子どもたちはあっという間にふざげ始めてしまう<sup>41</sup>。「子どもは、私たちの感情・思考も敏感に感じ取ります」<sup>42</sup>。

また、教師は常に「説得力のある明瞭な動き (überzeugende, klare Bewegung) や、魂が吹き込まれた身ぶり (beseelte, erfüllte Bewegung)」<sup>43</sup>や、「はっきりとした動き (klare



Bewegung) への努力」<sup>44</sup>が必要であり、「言葉から動きにいたるまで生き生きとさせるよう準備することが適切である」<sup>45</sup>。教師のこのような入念な準備から「温かい親密さ (warme Freudigkeit)」<sup>46</sup>が生じ、「子どもたちが心地よく元気づけられる」<sup>47</sup>という。シュタイナーによれば、周囲の人の内面が重要なのは、幼児がそれを模倣し身体の中に受け入れるからであり、そのことが幼児の身体器官の形成に大きな影響を及ぼすからである<sup>48</sup>。

#### 4. ライゲンの教育的意義

##### (1) 幼児の人間学—「身体」と「魂」と「霊」より成る存在—

すでに述べたように、ライゲンには、三つの側面すなわち、身体活動の側面、音楽活動の側面、言語活動の側面があるが、とりわけ、身体活動、身体表現としての役割は強く大きい。シュタイナーによる幼児教育において、身体表現活動を重視する理由は、シュタイナー幼児教育を支える人間学から導き出される。以下、その人間学がどのようなものであるかを明らかにし、それとのかかわりで、ライゲンの教育的な意義についてより詳しく述べたい。

シュタイナーの人間学によれば、人間の本性は、二元論、つまり人間は身体と精神あるいは物質と心から成り立つとの見方でとらえられるものではない。そうではなく、三分説、すなわち人間は「身体 (Leib)」と「魂 (Seele)」と「霊 (Geist)」の三つから成り立つとの見方でとらえられる。人間・幼児の本性は、身体と魂と霊から成り立っている。

身体とは、通常私たちが「からだ (体)」と言うときの、目に見える物質体の領域のことを意味する。それに対して、魂と霊は、目に見えないものであり、目に見えない力である。魂とは、具体的には、思考、感情、意志といった言葉で示される内的な活動の行われる領域である。そこでは、意欲、欲求、関心、興味、記憶、感激、怒り、喜び、悲しみなどさまざまな言葉で示される内的な活動が泉のように湧き出る。霊とは、身体と魂の最内奥でたえず活動し、身体と魂にすぐれて創造的・生産的・建設的に作用し、人間・幼児を真理や善などの気高い世界へと向かわせる神的な力を持つ目に見えない領域である。シュタイナーは、そのような力を多くの場合、「超感覚的な力 (das Übersinnliche)」と呼び、この上なく重視する。

このような三つの領域から成る人間・幼児をより深く考察すると、そこに二つの大きな特徴があることが分かる。特徴のその一は、身体と魂と霊が各々バラバラに別個にはではなく、相互に刺激し合い、影響し合って、幼児期、児童期および青年期、その後の生涯の中で成長し発達していくことである。その二は、身体と魂と霊の発達の度合いが、幼児期、児童期および青年期で異なることである。シュタイナーによれば、幼児期では、三つのうち身体が際立って発達し、魂は児童期に注目すべきかたちで成長する。霊は、青年期に著しく活発になり、成長する。

人間・幼児は、このような特徴を持つ存在であるが、幼児のうちで際立って成長する身体は、魂の成長・発達に影響を与えるがゆえに、この上なく重要である。それゆえ、シュタイナーにあっては幼児教育の目標の一つは、身体組織・器官を健全に形成すること、身体を活発に活動させることにある。このことに大きく寄与するのがライゲンである。

## (2) 身体器官の形成

周知のように、幼児は二本の足で立って歩くことができるようになると、走る、飛び跳ねる、かがむ……等々さまざまな身体運動を行う。適切な身体運動は、生理学的な意味での身体組織の活動を活発にし、身体組織を強める。すでに述べたようにライゲンでは、しばしば動物の特徴的な動きが取り入れられる。たとえば、ウサギやシカになりきって飛び跳ねたり、大きな歩調でゆっくり歩いたり<sup>49</sup>、かもになりきってよたよた歩いたり<sup>50</sup>、へびが草地をしのび歩く動作<sup>51</sup>をしたり、腕を広げ鳥が飛ぶこと<sup>52</sup>を表現したりする。「稲刈りのライゲン」では、園児たちが赤とんぼになりきって、腕を水平に広げ走り回ったり、片足立ちで静止する。人間にはない、動物ならではのこのような様々な動きは、子どもの身体組織にはたらきかけること、すなわち骨格の成長を促し、筋力を高め柔軟性やバランス感覚を養うことに大きく寄与する。

手の動き、のどや発声器官、腕や足の動きが、脳の形成に直接的に影響をもたらす。子どもがのちに学校や人生の中で必要とする知能は、記憶のトレーニングによってではなく、身体の動きによって分化し、強化される。言葉のやりとり、読むこと、そして注意や集中に向かう能力は、指の運動能力や踊りや跳躍、走ることそして遊ぶことによって身体器官のなかで整えられる。<sup>53</sup>

「すべての動きのプロセスは、子どもに深い影響をもたらし、発達途上の身体器官の内的な細分化 (innere Differenzierung) に影響する」<sup>54</sup>とされるように、ライゲンにおけるさまざまな動きは、単に幼児の骨格や筋肉だけでなく、内臓すなわち消化器官や血液循環組織といった身体器官の形成にも大きく作用するのである。

## (3) 繰り返しが意志の力を強める

幼児期に幼児の身体が目立って成長するということは、身体全体が活発に活動することであるが、シュタイナーによれば、身体活動の中には魂の中の「意志」が強く働いている。シュタイナーはこのことを次のような言葉で述べる。「意志的なもの (das Willensartige) が歯の生えかわり (7歳頃、筆者注) までの幼児の身体全体の中で強烈に働きます」<sup>55</sup>。身体の中には、意志が浸透しており、意志が身体に働きかけ、身体を活動へと向かわせる。ここでシュタイナーはある注目すべき見方を示す。それは、ライゲンを含む身体表現活動が、魂の中の「意志」を育てることである。シュタイナーによれば、意志の力が身体活動へと向かわせるだけでなく、身体活動が幼児の意志の力を育むのである。すなわちかれによれば、身体表現活動を活発に行えば行うほど、それは、幼児の魂の中の意志によい影響を与え、意志の成長へと導く。このようにシュタイナーにあっては、身体と意志の関係は、互いの相互作用のなかでとらえられるのである。

すでに述べたようにライゲンでは、四季の移り変わりを人間の生活を中心に、歌や言葉に合わせて、リズムで表現する。注目すべきことは、ライゲンを繰り返し繰り返し行うことである。同

じライゲンを毎日繰り返し、少しずつ増やしたりヴァリエーションをつけたりしながら、2、3週間続けることが多い<sup>56</sup>。そして次のライゲンに移るのである。子どもたちは、「前に行ったライゲンを繰り返しの喜びと安定感をもって行う」<sup>57</sup>が、繰り返すことによって、子どもたちは歌や詩をすっかり覚え、魂の奥深くに印象付けることができる<sup>58</sup>。「年長児は昨年浸り、取り組んだことを繰り返す。子どもたちは彼らの中に眠っていたものを繰り返す。それどころか単に眠っていただけではなく成長し熟したものを取り出すのである」<sup>59</sup>。

繰り返し行うことは、さらに、注目すべき意味を持っている。それは、身体活動における「繰り返し」が子どもの意志の育成に大きく寄与することである。このことの重要性をシュタイナーは次のように述べる。「いかにして私たちは子どもの意志に影響を与えることができるのか？それは、繰り返しの活動（das wiederholentische Tun）を行うことによってのみ可能となる」<sup>60</sup>。

子どもが、繰り返しの中で没頭して行為することを自分で自覚すればするほど、真の意志衝動へと昇格する。すなわち意識された繰り返しは、固有の意志衝動を耕す。そのことによって決意の力（die Entschlußkraft）へと昇格する。<sup>61</sup>

ライゲンを繰り返し行うのは、「身体活動による意志の発達（Entfallen des Willens durch die körperliche Tätigkeit）」<sup>62</sup>が促されるからである。そして、この「意志」の力は、続く児童期、青年期において、自らの力で主体的に決断し行動する力につながるのである。

#### (4) 話す力の形成

シュタイナーは、すでに述べた身体組織・器官の形成や、身体活動の他に、幼児の本性で注目すべきものとして、「言葉を話すこと」を挙げる。「言葉を話すこと」はシュタイナーにあっては、幼児教育の目標でもあるが、シュタイナーによれば、話す行為の出現の源泉の一つは、手足の運動に備わる「リズム」や身ぶりにあり、話す言語それ自体も音楽的な要素、つまりリズムや身ぶりをその本質とする。話す力は、根源的には幼児の身体全体の活動・運動に存在するのであり、話す力の育成は、たえず身体活動・運動を根本に据えたものでなくてはならない。

子どもはまず身体全体を通して、話すということを始めるのであります。つまり、まず外面的な動き、たとえば、脚の動きがあり、それによって言葉のくっきりとした輪郭が生み出されるのであり、腕や手の微妙な動きによって、語の活用と語形が呼び起こされるのであります。すなわち、子どもにおきましては、外面的な身体の動きが内面的な言葉の動きに置き換えられるのです。<sup>63</sup>

すでに述べたように、ライゲンは、①身体の動き、②音楽（歌）、③言葉（語ること、話すこと）の三つが組み合わさった活動である。これは、シュタイナーによる上述の「話す力の育成は、たえず身体活動・運動を根本に据えたものでなくてはならない」との見方、およびその身体活動の

なかでも「話す行為の出現の源泉の一つは、手足の運動に備わる「リズム」にある」こと、すなわちリズムミカルな動作や動きであることの必要性を満たし、具現化した教育方法である。ライゲンは、幼児の身体組織・器官の形成や、身体活動を活発に促すと同時に、話す力の育成すなわち言語能力の育成をも視野に入れているのである。

## おわりに

以上、シュタイナー幼児教育で行われているライゲンについて、その内容と特徴を明らかにし、ライゲンが幼児の模倣性に基づいて行われていること、絵画性と音楽的なリズムに満ちた身体活動であること、および身体器官の育成や身体活動による意志の育成、話す力の育成の観点から述べた。

ライゲンでは、教師の「語り」が大きな役割を果たしており、教師の「語り」によって想像の世界が生み出される。幼児は教師の語りから場面や情景をイメージ、想像し、それを身体で表現する。その際、教師を手本としながら、すなわち模倣を通してイメージ、想像したものを表現しているのである。幼児の想像力を育む観点から、ライゲンならびに身体表現活動を明らかにすることについては、稿を改めて論じたい。

## 註

- 1 国際シュタイナー / ヴェルドルフ幼児教育協会 HP <http://www.iaswece.org/>
- 2 今日の基準に照らすと不適切な用語であるが、日本の農作業を扱ったライゲンにおいて、これにたずさわる人間や風土の息づかいをイメージ豊かに伝えることを目的としているため、あえて用いることにする。
- 3 F. Jaffke, *Tanzt und singt*, Verlag Freies Geistesleben, 1988, S.11.
- 4 A.a.O., S.11.
- 5 A.a.O., S.11.
- 6 W. Saßmannshausen, *Waldorf-pädagogik auf einen Blick*, Verlag Herder Freiburg im Breisgau, 2008, S.52.
- 7 F. Jaffke, *Tanzt und singt*, Verlag Freies Geistesleben, 1988, S.14.
- 8 A.a.O., S.9.
- 9 A.a.O., S.11.
- 10 A.a.O., S.9.
- 11 A.a.O., S.9.
- 12 雑創の森研究所編「雑創の森ノート 劇あそび」2007年、84頁。
- 13 高橋弘子『日本のシュタイナー幼稚園』水声社、1995年、122頁。
- 14 雑創の森研究所編「雑創の森ノート 劇あそび」2007年、84頁。
- 15 Internationalen Vereinigung der Waldorfkinderkärten [Hrsg.] *SINGSPIELE UND REIGEN*, Verlag Freies Geistesleben, 1989, S.8.

- 16 R. Steiner, *Der pädagogische Wert der Menschenerkenntnis und der Kulturwert der Pädagogik*, Rudolf Steiner Verlag, 1989, S.46.
- 17 A.a.O., S.46.
- 18 R. Steiner, *Die gesunde Entwicklung des Menschenwesens*, Rudolf Steiner Verlag, 1985, S.129, R. シュタイナー、西川隆範訳『子どもの健全な成長』アルテ、2004年、48頁。
- 19 R. Steiner, *Die Erneuerung der pädagogisch-didaktischen Kunst durch Geisteswissenschaft*, Rudolf Steiner Verlag, 1993, S.145, R. シュタイナー、西川隆範訳『精神科学による教育の改新』アルテ、2005年、96頁。
- 20 F. Jaffke, *Tanzt und singt*, Verlag Freies Geistesleben, 1988, S.24.
- 21 Vgl. R. Steiner, *Gegenwärtiges Geistesleben und Erziehung*, Rudolf Steiner Verlag, 1923, S.117, R. シュタイナー、佐々木正昭訳『現代の教育はどうあるべきか』人智学出版社、1985年、158頁。
- 22 Internationalen Vereinigung der Waldorfkindergärten [Hrsg.] *SINGSPIELE UND REIGEN*, Verlag Freies Geistesleben, 1989, S.56.
- 23 F. Jaffke, *Tanzt und singt*, Verlag Freies Geistesleben, 1988, S.10.
- 24 W. Saßmannshausen, *Waldorf-pädagogik auf einen Blick*, Verlag Herder Freiburg im Breisgau, 2008, S.52.
- 25 *Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft*, Rudolf Steiner Verlag, S.26, 1978, R. シュタイナー、新田義之監修、大西そよ子訳『精神科学の立場から見た子供の教育』人智学出版社、40頁、1987年。
- 26 R. Steiner, *Erziehungskunst. Methodisch-Didaktisches*, Rudolf Steiner Verlag, S.18, 1919.
- 27 W. Saßmannshausen, *Waldorf-pädagogik auf einen Blick*, Verlag Herder Freiburg im Breisgau, 2008, S.52.
- 28 A.a.O., S.52.
- 29 A.a.O., S.52.
- 30 A.a.O., S.52.
- 31 雑創の森研究所編「雑創の森ノート 劇あそび」2007年、84頁。
- 32 Internationalen Vereinigung der Waldorfkindergärten [Hrsg.] *SINGSPIELE UND REIGEN*, Verlag Freies Geistesleben, 1989, S.55.
- 33 雑創の森研究所編「雑創の森ノート 劇あそび」2007年、84頁。
- 34 W. Saßmannshausen, *Waldorf-pädagogik auf einen Blick*, Verlag Herder Freiburg im Breisgau, 2008, S.52.
- 35 雑創の森研究所編「雑創の森ノート 劇あそび」2007年、84頁。
- 36 F. Jaffke, *Tanzt und singt*, Verlag Freies Geistesleben, 1988, S.11.
- 37 *Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft*, Rudolf Steiner Verlag, 1978, S.26, R. シュタイナー、新田義之監修、大西そよ子訳『精神科学の立場から見た子供の教育』人智学出版社、1987年、40頁。
- 38 高橋弘子『日本のシュタイナー幼稚園』水声社、1995年、121頁。
- 39 同上。
- 40 F. Jaffke, *Tanzt und singt*, Verlag Freies Geistesleben, 1988, S.24.
- 41 A.a.O., S.26.

- 42 R. Steiner, *Die gesunde Entwicklung des Menschenwesens*, Rudolf Steiner Verlag, S.129-130, R. シュタイナー、西川隆範訳『子どもの健全な成長』アルテ、2004年、48頁。
- 43 Internationalen Vereinigung der Waldorfkindergarten [Hrsg.] *SINGSPIELE UND REIGEN*, Verlag Freies Geistesleben,1989, S.56.
- 44 A.a.O., S.7.
- 45 A.a.O., S.7.
- 46 A.a.O., S.7.
- 47 A.a.O., S.7.
- 48 広瀬俊雄『シュタイナーの人間観と教育方法』ミネルヴァ書房、1988年、117-118頁。
- 49 Internationalen Vereinigung der Waldorfkindergarten [Hrsg.] *SINGSPIELE UND REIGEN*, Verlag Freies Geistesleben,1989, S.7.
- 50 A.a.O., S.56.
- 51 F. Jaffke, *Tanzt und singt*,Verlag Freies Geistesleben, 1988, S.24.
- 52 A.a.O., S.23.
- 53 Internationalen Vereinigung der Waldorfkindergarten [Hrsg.] *SINGSPIELE UND REIGEN*, Verlag Freies Geistesleben,1989, S.56.
- 54 F. Jaffke, *Tanzt und singt*,Verlag Freies Geistesleben, 1988, S.10.
- 55 *Die pädagogische Praxis vom Gesichtspunkte geisteswissenschaftlicher Menschenerkenntnis. Die Erziehung des Kindes und jüngeren Menschen*, 1923, S.96.
- 56 高橋弘子『日本のシュタイナー幼稚園』水声社、1995年、121頁。
- 57 雑創の森研究所編「雑創の森ノート 劇あそび」2007年、85頁。
- 58 高橋弘子『日本のシュタイナー幼稚園』水声社、1995年、122頁。
- 59 Internationalen Vereinigung der Waldorfkindergarten [Hrsg.] *SINGSPIELE UND REIGEN*, Verlag Freies Geistesleben,1989, S.8.
- 60 H.von Kügelin [Hrsg.] *PLAN UND PRAXIS DES WALDORFKINDERGARTENS*, Verlag Freies Geistesleben, 1987, S.73.
- 61 A.a.O., S.73.
- 62 R. Steiner,*Gegenwärtiges Geistesleben und Erziehung*, Rudolf Steiner Verlag, 1923, S.127, R. シュタイナー、佐々木正昭訳『現代の教育はどうあるべきか』人智学出版社、1985年、171頁。
- 63 R. Steiner,*Gegenwärtiges Geistesleben und Erziehung*, Rudolf Steiner Verlag, 1923, S.110, R. シュタイナー、佐々木正昭訳『現代の教育はどうあるべきか』人智学出版社、1985年、149頁。